

博士号取得報告書

2020/11/18

アリゾナ大学植物科学科

種田 修三

約5年間のアリゾナでの留学生活だったが、入学したときは想像もしていなかったことの連続だった。コロナで研究が一時停止し、卒業式もなくなったことはもちろんだが、それでも一番記憶に残っているのは研究のためのサンプリング旅行である。巨大プロジェクトの一環としてパナマ、チリ、マレーシア・ボルネオ島、南アフリカそしてナミビアと5カ国を旅した。すでに各旅行の詳細はこれまでの近況報告書に記したが、ここで簡単に振り返ろうと思う。

主に植物採集を行う旅だったが、記憶に残っているのは森に飛び込み、タランチュラを見て、土砂降りのなかの4時間ハイキング、毛虫やヒルと遊び、サファリパークでカバとブラックマンバに怯え、砂漠でキリンを見られたことといった感じ。食では、パナマでのフライドチキンの国民的人気を知り、チリでの最後の食事がピザハットで終わり、イモムシもごちそうになり、シマウマやダチョウも食べた。こう聞くと波乱万丈、楽しい旅にも聞こえるが、実際には様々な苦労があった。植物採集が終わればすぐに滞在拠点に戻り、採集した植物から菌を培養した作業に入るため、自由時間はほとんどなかった。培養作業も夜の2時までかかったこともある。パナマでは電気が一時的に止まったため、ヘッドランプをつけながらの培養作業だった。また旅行中は全員で共に食事をするため、自然とパンやクラッカー等が多くなり、朝はヨーグルトのみのような毎日だった。朝からしっかりとお米を食べたい私にとっては辛いことも多かった。

こうした苦労の甲斐もあってか、1報の論文が微生物の専門誌に発表され、3報が現在査読中である。査読中の2報は主要な国際論文誌に、残りの1報は真菌専門の論文誌に投稿している。まだ発表されてはいないものの、最初の2報は内生菌としてはスケール、インパクトのともに大きな研究になったと感じている。どの論文誌に掲載されるかは未定だが、指導教官や共同研究者らもその出来には満足しており、内生菌に関する理解を深められる論文になったのではないだろうか。

さて、博士論文の公聴会及び審査会は残念ながらZoom経由で行うことになってしまった。公聴会は50分のプレゼンで、その後の審査会は1時間半程度、6名の教授との口頭試問である。プレゼンでは特に目立った失敗もなく、審査会では博士論文だけでなく研究者としての素質等についても教授らと楽しく話す事ができた。「世界的に有名なラボを卒業するにあたって、あなたと指導教官の違いはなんですか?」、「博士課程において、研究以外で何を一番学びましたか」と聞かれたことは記憶に新しい。

また博士を卒業するためには、公聴会と審査会を通過することに加え、博士論文を完成させる必要がある。博士論文自体は査読中の論文をコピペするだけでいいのだが、これらの論文をまとめるレビューを博士論文の序論として書かなければならない。通常

はダブルスペースで10ページほど書くようだが、なにかをまとめたり整理するのが好きな私はここで何を思ったか、せっかくなので本気で内生菌に関する知見をまとめてやろうと思い、40ページ（引用文献含め70ページ）という、博士論文の序論としては大作を著してしまった。ただ、頑張っただけあって、審査会にて先生方から、よく書けているのでぜひレビュー論文として発表したらどうかと言われた。実際に論文にするかはこれから指導教官と相談予定であるが、こうした評価をいただけたことは非常に嬉しかった。

博士課程は振り返ってみるとあっという間だった。審査会でも聞かれたが、アリゾナに来て本当に学んだことはなんだろうか。私は研究についてももちろんだが自分について、だろうなと思う。研究や私生活での楽しさやしんどさを経て湧き出る感情や考え、気づきは日本では日常に埋もれて忘れてしまうことが多かったが、アメリカではなぜか長く頭にとどまり、向かい合う機会が多くなった。次第に自分が何をやりたいのか、自分がどのような人でどのような研究者になりたいのかということが以前に比べて、より具体的に分かってきたような気がする（と同時にわからなくなったりもするのだが）。多様性や教育の重要性についても考える機会が多かった。もちろん研究者としての自覚や責任といったものも学ぶことができた。特に生態学者として、他国でのサンプリングは多くの法的な制限があるため、こうしたことに対する理解も深めることができた。

以前、留学前の報告書にこう書いた。「約5年間、アリゾナでの学生生活で自分がどのような顔付きになるのか、どのようなキャリアを歩むのか自分自身楽しみで仕方ありません。」実際今はどんな顔つきになっただろう。博士課程のストレスでしわと白髪が増えただけだろうか。鼻毛にも白髪ができた。たった5年ではあったが、色々な経験を経てどこかイケメンになったとは思えなくもない。これは願望ではない。実際、日本にいるときと比べ数倍もの量の野菜を食べて痩せたので根拠はあるのだ。白い鼻毛を覗かせるイケメンになれたのは、間違いなく船井財団のお力添えのおかげです。また、船井財団からの多大なるご支援があったからこそ、これ以上ない環境で生態学を学び、研究者としての第一歩を踏み出すことができました。これからは留学生活で得た知識や経験を日本の社会に貢献できるよう邁進していきたいと思います。またさらなるイケメンになれるようにがんばります。5年間に及ぶご支援、本当にありがとうございました。